

CIFLE Report No. 18

英語力をどう定義するか：タスク・ハンドリング力

田中茂範（ココネ言語教育研究所）

はじめに

my English は my Japanese と同じく、個人の言語能力、英語力です。my English の構築は、個人の問題であり、一人ひとりの個性を帯びたパーソナルな経験です。したがって、my English は教わるものではなく、自ら構築するものなのです。こうした姿勢を持つことが、よりよい英語の学びに繋がるはずです。

英語を学ぶ過程で、語彙を覚えたり、文法問題を行ったり、教科書の英文を音読したり、英語を聞いて筆写したり、といった活動をたいていの方が経験していると思います。しかし、闇雲に英語を勉強してもなかなか英語が使えるようにはなりません。つまり、my English の構築への貢献が期待できないということです。では、どうすればよいか。英語をどう学ぶべきかという問いに対する解答は、目標としての英語力とは何であるかという定義から導きださせるというのが筆者の立場です。

タスク・ハンドリングと言語リソース

英語力（communicative competence in English）は、以下のようにタスク・ハンドリングの力（課題をこなす力）と言語リソース（課題をこなす際に使える英語）の相互関係として捉えることができます。

タスク・ハンドリング (CAN-DO)



言語リソース (CAN-SAY)

つまり、「どういうタスクをどれだけ機能的に（うまく）、どういった言語リソースを使って遂行できるか」、これが英語力とは何かについての問いです。ここでいうタスクには、顔を洗う、朝食を食べるなどのように言語を必ずしも伴わない「非言語タスク」、「自己紹介する」「値段の交渉をする」といった言語を伴う「言語タスク」があります。実際、生きるということとは、連続的にさまざまなタスクを処理することにほかなりません。このように、タスクというものを広義に捉えると、すべての言語活動は、意識するしないにかかわらず、なんらかのタスクを遂行するために行われるものであるということになります。

最近、英語教育でも CEFR (*Common European Frame of Reference, The Council of Europe*) の影響下、can-do (何ができるか) が注目されています。英語教育の can-do リストを作成することは、英語を使って何ができるかを記述することで、英語教育の目標を設定することになり、それ自体はとてもよいことです。この can-do はタスク・ハンドリングのことに考えることができます。しかし、can-do だけでは不十分です。というのは、そのままでは、どういう言語リソースを使って、どういうタスクを行うかという観点で明確に示されていないからです。タスク・ハンドリングが can-do (何ができるか) だとすれば、言語リソースは can-say (何がいえるか) として記述することができます。仮に言語リソースが限られていても多くのタスクを行うことができるはずですが、しかし、言語リソース (レパートリー) が豊かになれば、それだけタスク遂行における言語表現の可能性は高まるはずですが。

英語力はタスク・ハンドリングと言語リソースの関係として定義することができます。そして、英語をどう学ぶべきかという問いに対しては、「タスク・ハンドリングと言語リソースの両面に注目する必要がある」と答えることができます。語彙や文法を学ぶ際にも、タスク・ハンドリングに利用可能なリソースになるように学ぶというのがここでのポイントです (具体的には後で詳述します)。

タスク・ハンドリングと言語リソースの関係として英語力を定義するというのは新しい考え方です。そこで、以下では、この考え方の英語教育における意味について述べ、それに引き続き、英語を学ぶという観点からみたタスク・ハンドリングに立ち戻ります。

英語教育における小・中・高の接続問題

英語教育分野では、小学校の英語と中学校の英語、あるいは中学校の英語と高校の英語の「接続」が大きな問題になっています。つまり、小学校から高校、あるいは大学 (さらには社会人) までを射程に入れた英語カリキュラムをどう編成すればよいかという問題だといえます。タスク・ハンドリングと言語リソースの関係というここでの枠組みに発達の観点を加えると、この問題に対する 1 つの「解」が見えてきます。小学生 4 年生は大学 2 年生とは異なった言語世界に生きています。つまり、小学校 4 年生に典型的なタスクというものがあり、それを行う典型的な言語リソースというものがあります。それらは大学 2 年生のものとは同じではないはずですが。例えば小学 4 年生が「家賃の値段交渉」というタスクを行うことは考えにくいでしょう。また、10 歳前後の子どもが *I'd appreciate it if you could...* という表現 (言語リソースの 1 つ) を使うことも想像しにくいことだと思います。しかし、大学 2 年生になると事情は異なります。

つまり、小学校から高校あるいは大学までの発達のカリキュラムを編成する際に、何段階かの発達ステージを設け、それぞれのステージで典型的と思われるタスクと言語リソースを配列していくことで、タスク・ハンドリングの種類と量、言語リソースの豊富さにおいて比較可能なカリキュラムができるということです。

4 技能モデルの再考

「タスク・ハンドリング」という観点の導入は、長年常識となっている「4 技能モデル」に問題を投げかけると同時に、代替案を提案するものです。ここでいう「4 技能モデル」というのは、スピーキング、ライティング、リスニング、リーディングを4つの技能 (skill) とみなすというものです。この4技能モデルは、これまでの外国語教育の基本的枠組みを提供してきました。「小学校の段階では、スピーキングとリスニングを専ら行い、ライティングとリーディングの導入は最小限に抑える」だとか、「まず、リスニングをしっかりとってから、スピーキングに移行する」といった考え方は、すべて4技能モデルが前提になっています。近年「4技能統合」という言い方が英語教育関係者の間ではよく使われ、バランスよく4技能を学び、4技能の融合をはかる必要性が強調されています。

しかし、「4技能モデル」には、本質的な問題が含まれています。すなわち、例えばスピーキングを「スキル」と呼んだ途端に、話す目的の遂行ではなく、話すという行為そのものに関心が行ってしまい、それを評価する際に、発音、流暢さ、適切な語彙の使用、文法的な正確さ、表現の適切さなどが評価基準になってしまいます。しかし、スピーキングを行う際には必ず「目的」があり、その目的はタスクと繋がっています。タスク・ハンドリングの観点からは、評価の対象は「タスクの達成 (task achievement)」に向けられるべきです。しかしながら、4技能モデルは、その性格上、技能的な側面に評価者の目を向けさせるという問題があります。つまり、「何のために話すのか」という目的が欠如するということです。

リーディングについて考慮することは、「4技能」という呼び方の問題点と同時に、「何のためのリーディングか」という目的意識の欠如という問題を浮き彫りにすることになります。まず、リーディングとは「文字から意味を構成する過程」のことであり、Frank Smith (1976) は「リーディングはリーディングによって学ぶしかない (learning to read by reading)」と言い切りました。スピーキングは「発音」や「流暢さ」あるいは使用される語彙や文法の観点から評価されるといいました。しかし、リーディングにはそういった指標は適用できません。そこで、英文を読み、どれぐらい内容の把握ができたかというやり方でリーディング力は評価されることになります。実際、標準テストなどでリーディングは“reading comprehension”と呼ばれます。つまり、「読解力 (読んで内容を理解する力)」ということです。これは、リーディングというものをスピーキングと同様のスキルとして捉えることのむずかしさを表しています。

「リーディングの目的は読解力にある。そして多読 (たくさん読むこと) で読解力を高める」ということが、英語学習において常識になっていると思います。たしかに、その通りです。しかし、多読によって読解力を高めるという主張には、「何をどのように読む」という点が抜けています。ここでも強調しなければならないのは、リーディングという行為そのものではなく、何のためのリーディングかということです。同じ多読でも目的を意識

した読み方をすることで、リーディングをさまざまなタスクとして考えることができるようになります。リーディングの目的としては、例えば、以下が含まれます。

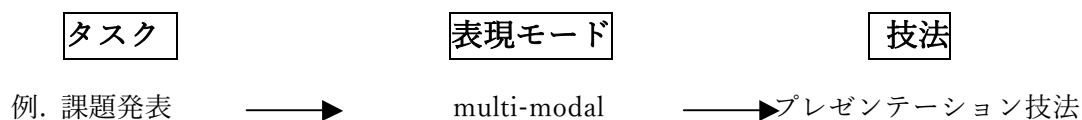
- 情報を得るために読む：論文を書くため先行研究を読む；どういう割引商品があるか知るために広告を読む
- 学習のために内容を暗記するように読む：教科書を読む
- 英文の内容を理解し、設問に答えるために読む：入試問題を解く
- 分析し批判するために読む：評論家の読み方
- 娯楽のために読む：雑誌を読む、新聞を読む
- 相手の心（気持ち・要求内容）を知るために読む：個人的な手紙などを読む

「情報を得るために読む」と「娯楽のために読む」とでは読むタスクが異なり、それに応じて読む観点も、読む姿勢も異なるはずです。「分析し批判するために読む」というタスクと、「学習のために内容を暗記するように読む」というタスクを比べると、やはり読む姿勢が異なるでしょう。前者は書かれた内容を「批判の対象」として捉えますが、後者は書かれた内容を「知識」として捉えます。

さて、スピーキングやリーディングが「技能 (skill)」でないとしたら、それは何でしょうか。一言でいえば、それは「表現のモード (mode of expression)」です。表現モードには、言語を使わないノンバーバル・モード (nonverbal mode) と言語を使うバーバル・モード (verbal mode) があります。言語を使った表現モードには、表現する側の「産出モード」(スピーキングとライティング) と、表現を受ける側の「理解モード」(リスニングとリーディング) が含まれます。多くの言語活動はマルチ・モーダルに行われます。しかし、同時に、ある表現モードに中心を置いたタスクも考えられます。例えば「大学で経済学入門の講義を受講する」というのは主にリスニング・モードを使ったタスクであり、「批評をするためにある小説を読む」というのは主にリーディング・モードを使ったタスクだといえます。しかし、「大学で経済学入門の講義を受講し、ノートを取る」となれば、リスニングとライティングが同時に関わるマルチ・モーダルなタスクということになります。大学の講義にワークショップが組み込まれれば、当然、スピーキング・モードが加わります。

タスクと表現モードの関係について見てきましたが、「技能・スキル」という概念はここでの枠組みの中でどう位置づければよいのでしょうか。一言でいうなら、スキルはタスクを処理するために使われるものですが、スピーキング（話すこと）がそのままスキルになることはありません。これが従来の 4 技能モデルとは違うところです。大学で「与えられた課題をクラス内で発表する」というタスクを想定してみましょう。ある話題について調査し、その結果を発表するというのがこのタスクですが、ここでの主要な表現モードはスピーキングですが、発表には、非言語モード、スライドの作成、スライドの提示、発表についての質疑応答などが含まれ、結局、マルチ・モーダルなタスクだといえます。そして、

そのタスクを効果的に行うために必要なのが「プレゼンテーション技法」です。すると、4技能モデルに代わる考え方として、以下の図のように、「タスク」「モード」「スキル」の3項関係の枠組みが出来上がります。



課題発表というタスクの評価は、プレゼンテーション技法を上手にを使って、表現モードがどう使われたかによって行われます。プレゼンテーション技法は、「魅せ方」「メリハリ」「イラストの力」「間の作り方」などに関するテクニックが含まれるでしょう。そのテクニックが表現モードの上手な使い方に導き、それがタスクの出来栄を決めるのです。

ここで評価の観点から表現モードに注目してみましょう。課題発表は、本来、マルチ・モーダルなタスクですが、ここでは中心的なモードとしてスピーキング、そしてそれに伴う表情やしぐさだけに注目します。ここでのポイントは、4技能の1つとしてではなく表現モードとしてのスピーキング（伝達と態度）に注目した場合、どういう評価基準が考えられるかということです。具体的にいくつかの評価項目を挙げてみます。

【伝達と態度】

(1) 話す声の明瞭さ:

不明瞭 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 明瞭

(2) 話す速度

ついていきにくい 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 ついていきやすい

(3) 間の取り方

下手 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 上手

(4) 話す分量と時間配分

不適切 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 適切

(5) 意味を伝える熱意

低い 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 高い

(6) 準備

不十分 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 十分

(7) 自信度

低い 1-----2-----3-----4-----5-----6-----7 高い

ここで注目すべきは、「伝達と態度」の指標に、発音の正確さやイントネーションの適切さ、あるいは流暢さなどが明示的には含まれていないということです。(1)で重視しているのは

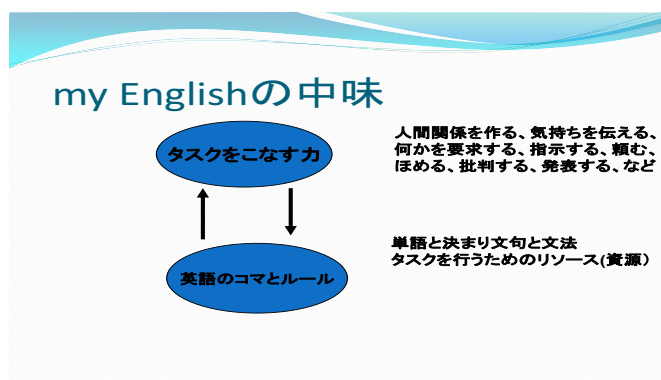
「明瞭 – 不明瞭」という指標です。発音に正確さを欠いたとしても、国際学会などの場面で、十分に明瞭な言葉で発表をするということが考えられます。さらに、(2)の指標に見られるように、話す速度(落ち着いて話すか慌てて話すか)によって「ついていきやすい – ついていきにくい」が分かれ、それがタスクの遂行に影響を与えます。早すぎても、遅すぎても理解を妨げるという可能性があるのです。話す速度に関係するのは「間の取り方(3)」です。間の取り方はプレゼンテーションの技法にも含まれるテクニックです。さらに、「発表内容の量と時間配分(4)」が適切であるかどうかにも伝達に大きな影響を与えます。また「態度」の指標として「熱意(5)」「準備(6)」「自信(7)」が含まれています。熱意と自信がなければ、どんな発表も人を惹きつけることはないでしょう。そして、自信は準備と相関関係があるのです。

ここで挙げた指標はタスク・ハンドリングの力を測定するものであり、英語が母語話者の人でも適用可能です。スピーキングを技能とみなし、スピーキングという行為そのものを評価する際には、母語話者は「模範」になるはずですが、タスク・ハンドリングという観点からみれば、母語話者の中にも上手な人と下手な人がいるということになります。

さて、ここでの論点は、英語を学ぶという際に、4技能という発想から決別し、タスク・ハンドリングを意識するということが、英語力を身に付ける際には重要であるということです。なぜならタスク・ハンドリングは英語力を規定する2つの構成要素の1つだからです(タスク・ハンドリングに関する詳細は、本章の中で後述します)。

知識としての英語と言語リソースとしての英語

英語力を規定するもう1つの構成要素は言語リソース(LR)です。言語リソースとは、将棋になぞらえていえば、「表現のコマとルール」に当たります。ここでいうコマには、語彙だけでなく決まり文句(定型表現)も含まれます。以下の図のように、コマとルーツを使って、人は、人間関係を作る、気持ちを伝える、指示するなど無数のタスクを行っているのです。

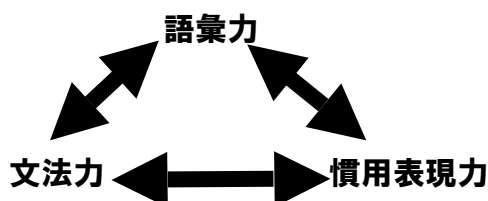


将棋には駒とルールがあります。しかし、それは将棋を指すという目的に限定した駒でありルールです。しかし、言語の場合は、無数のタスクを有限の言語リソースを使ってこな

すことができるという意味において無限の可能性があります。小説も、歴史も、学問もすべて言語のコマとルールを使って生み出されるのです。

言語リソースは3つの部門から構成されます。それは、語彙力、文法力、それに慣用表現力です。

言語リソースの構成



3つの部門は双方向の矢印があるように相互に関連し合っています。語彙力と文法力の関係は、例えば make という動詞を考えてみればよいでしょう。「使役動詞」としての make になると文法に関係してきます。同様に who というのは1つの語ですが、それはどのように使われるかに注目した途端に、疑問代名詞や関係代名詞のはたらきに関心が向かい、文法問題に結びついていきます。語彙力と慣用表現力の関係についても、例えば could を取り上げてみるとその結びつきがわかると思います。could は語彙(辞書の項目の1つ)ですが、could you please …? となると「依頼」の意味を表す慣用表現になります。同様に、文法力と慣用表現力にも結び付きがあります。例えば「比較」は文法項目として扱うことができますが、as … as possible だとか nothing is more … than などは慣用化された構文とみなすことができます。文法の中にも慣用があるということです。

ここで「言語リソース (language resources)」という言い方をしているのには理由があります。タスクを行うために利用可能なのがリソースですが、語彙を覚え、文法を学んだとしてもそれがタスクのための言語リソースになるという保証はありません。英語の語彙をたくさん知っていて、英文法も詳しい人が、英語が使えないということがよくあるからです。具体例として、put や speak といった動詞を取り上げてみましょう。これらは基本的な動詞とみなされ、中学校の段階で習う語彙です。そして、高等学校では既習語とみなされ、特段の関心が向けられることはほとんどありません。つまり、生徒は put や speak はすでに知っている語彙とみなされるのです。しかし、これらの動詞を知っているということと基本語力があるということは同じではありません。大学生に「目薬を指す」って英語でどうか知っているかと尋ねると、咄嗟に put が出てくる学生はほとんどいません。「82円切手を封筒に貼る」にしても反応は同じで、put an 82-yen stamp on the envelop という表現がなかなかできません。つまり、put を使い切れていないということです。また、ゴリラに人間の言語を教えた結果が報告され、A gorilla can [talk, speak]. というタイトルを付す際に、speak と talk のどちらが正解かと大学生に聞くと、確信をもって talk を選ぶ者は多くありま

せん。一枚の絵に言及して「この絵は多くを語る」と表現したい際に、This picture [talks, tells, says] a lot. の選択肢の中からどれを選ぶかという課題についても同様です。つまり、基本動詞の使い分けがうまくできないということです。

put や speak はよく知っている語彙です。しかし、知っていることと基本語力があるということは同じではありません。語彙をタスクの遂行のための LR にするためには「基本語力を鍛える」という視点が必要なのです。同様に、will と be going to が未来のことを表現するのに使われるといった文法知識を持っていても、「彼女はこの6月に赤ん坊が生まれる」という状況を表現するのに She is going to have a baby this June. と be going to を使うことができなければ文法力とはいえません。文法を知っているということと、自由に文を作り出すことができる文法力を持っているということは同じではありません。言語リソースとしては文法力を身につける必要があるのです。

ここでいう慣用表現力というのは、状況に応じて適切な慣用表現（定型表現、熟語、諺など）を選び、使うことができる力のことをいいます。しかし、熟語はひたすら覚えるものという意識はあっても、それが表現活動において果たす役割について自覚していることは少なく、結局、表現は知っていても使えないという現象が起こるのです。

「言語リソース」という用語を導入することにより、タスクをこなすためのリソース（資源）を充実させるという学習目標に繋げることができると思います。具体的には、語彙知識を語彙力に、文法知識を文法力に、そして慣用表現についての知識を慣用表現力にするにはどうすればよいかを問題意識として持つことです。「語彙を覚える」ということと「語彙力を高める」では、学習する際に意識のありようがだいぶ違ってくるはずですが、なぜなら「語彙力を高める」と表現した途端に、「語彙力とは何か」そして「それをどうやって高めるのか」という問題が出てくるからです。同じことが、文法と慣用表現についてもいえます。

タスク・タイプと英語力

さて、再びタスクに話を戻します。タスクといってもその数は無数にあり、膨大な数のタスクをどう学べばよいのかという問題が出てきます。また、タスクの難易度をどうやって決めればよいのかという問題も出てきます。まず、難易度の問題を少し考えてみます。以下は、タスクの数例です。

TASK(例)

- ・自己紹介を行う（興味・関心を含める）
- ・週末何をしたかを語る
- ・友人との雑談の中で、ある朝の行動について語る
- ・ある人物について外見と性格を語る
- ・ある商品の解説を5分で行う

- ・あるレストランでの1コマを語る
- ・好きな男性に自分の思いをしっかりと伝える
- ・ある会議で議長を務める
- ・自分の町の様子を説明する
- ・外国の友人にある場所から自宅まで来る来方を説明する
- ・中華料理とフレンチを比較して語る
- ・あるレストランでの1コマ（意外なこと）を語る
- ・国益に合うように TPP 交渉を行う
- ・学会で研究発表を行う

このリストをざっと見るとわかるように、難易度の低いものもあれば高いものもあります。これはやれそうだというもの、これは手に負えないというものなどたくさんタスクがあります。タスクの難易度は何でできるのでしょうか。手っ取り早く難易度を判定するには、以下のように4つの指標でタスクを特徴づけるという方法があります。

難易度	Easy 1---2---3---4---5---6---7	Difficult
指標		
Simple（単純な）	1---2---3---4---5---6---7	Complicated（複雑な）
Familiar（親しみのある）	1---2---3---4---5---6---7	Unfamiliar（親しみのない）
Prepared（準備できる）	1---2---3---4---5---6---7	Spontaneous（即興の）
Procedural（手順のある）	1---2---3---4---5---6---7	Free-floating（自在な）

まず、simple – complicated の指標ですが、これはタスク自体の複雑さをみる指標です。「ある食べ物の感想を述べる」と「2つの食べ物を比較して、両者の違いを述べる」というタスクであれば、後者のほうが複雑さは高いといえるでしょう。日本文化にふれて「若者言葉の『かわいい』を説明する」と「『義理』と『人情』について説明する」ではやはり後者のほうが複雑な説明の過程が要求されます。

familiar – unfamiliar の指標はタスクに対する親しみ度の度合いに関するものです。筆者たちにとっては大学で講義をするというタスクは日々慣れ親しんでいるものですが、サッカーの実況中継をするというのは、まったく親しみのないタスクです。概して、親しみの高いタスクのほうがそうでないものより難易度が低いといえます。

prepared – spontaneous は「準備することが可能かどうか」に関する指標です。ある結婚式で祝辞の詞をいうのに事前に頼まれていれば、それなりに準備ができます。しかし、あるパーティーの席上で突然「一言をお願いします」とふられた場合は即興で対応するしかありません。もちろん、準備したタスクのほうがそうでないものより概してやさしいといえるでしょう。学会などで発表はなんとかできるが、質疑応答は苦手であるという場合も

ここでの指標が当てはまります。

そして、procedural – free-floating の指標は、例えば「会議の司会」と「雑談」の違いです。会議の司会者が話す言葉はある程度予想がつきます。一方、雑談は手続き的な流れに沿って行われることはまれで、偶発性をともなって自由に流れていきます。

この4つの指標は、個人が一人一人直観で判定するものですが、「一般的に他の人もそうだろう」という想定の下、タスク特性を教師（複数人であればなおさらよい）が判断するということもあり得ます。例えば「結婚式で3分程度の祝辞の詞を述べる」というタスクがあるとします。筆者の判断で難易度を判定すると以下ようになります。

タスク：「結婚式で3分程度の祝辞の詞を英語で述べる」ことを3か月前に頼まれ承諾

Simple（単純な） 1---2---3---4---⑤---6---7 Complicated（複雑な）
Familiar（親しみのある） 1---2---3---4---5---6---⑦ Unfamiliar（親しみのない）
Prepared（準備できる） ①---2---3---4---5---6---7 Spontaneous（即興の）
Procedural（手順のある） 1---2---③---4---5---6---7 Free-floating（自在な）

難易度： Easy 1---2---3---4---⑤---6---7 Difficult

3分の内容となるといろいろな情報を組み込む必要があるため複雑さは⑤、そしてまったく慣れていなければ親しみ度は⑦、3か月前なので十分な準備ができることから準備については①、そして祝辞にはある程度の型があるため、流れについては③となり、総合的にはややむずかしい⑤となります。

can-do と can-say がタスクの両輪

しかし、これだけではタスクの can-say 面がまったく含まれていません。本来は、タスクと使用する言語リソースに関する情報があって、タスクの難易度やハンドリングの可能性が判断されることとなります。簡単な例でいえば、タスクは「1分間の自己紹介ができる」だとします。それに言語リソースとしての情報が以下のように加わります。

task：1分間の自己紹介をすることができる

can-say： Let me introduce myself. I'm ..., I work for ..., I'm interested in... because ...などを使うことができる

また、「電話でレストランの予約をする」というタスクを考えてみましょう。このままでは難易度の判定はむずかしいですが、以下の情報が加わるとどうでしょうか。

タスク：電話でレストランの予約をする

can-say：「日時」「人数」「庭に近い席を希望」「名前」「自分の連絡先」を伝える

このタスクをこなすためには、例えば以下のような表現をすることが必要となります。

A: Maxim de Paris. Sally Edmands speaking. May I help you?

B: Yes. I'd like to make a reservation for Thursday evening. We are the party of four and we hope to take the table close to the garden. My name is Jun Takahashi, and my phone number of 090-1100-3333.

A: All right, Mr. Takahashi. We'll reserve the table right next to the main garden. Thank you for calling and we are looking forward to seeing you.

「人数・日時を告げて予約する」際の表現としては、reserve a table for three, at eight, tonightなども含まれます。また、希望の時間が取れないときに交渉する必要が出た場合、タスクの難易度は高くなる可能性があります。その際の表現としては What time is available? や When do you expect an open table?などがあります。

別の例をみてみましょう。タスクは「イタリアの地理的特徴を記述する」というものです。そして、言語リソースに関する情報として以下が含まれたとします。

task：Describe what Italy is like geographically.

can-say: When describing, include the following:

- ・日本より少し小さい；アリゾナとほぼ同じ大きさ
- ・イタリアの北部はオーストリアとスイスと境界を接している
- ・形は長靴のようである

ここで示した情報を表現するには、以下のような言語リソースが必要となる。

- ・ little smaller than Japan; about the same size of Arizona
- ・ the north part being bordered by Austria and Switzerland
- ・ looks like a boot in shape

そして、これらの表現を使うことで、以下のようにイタリアの地理的特徴を記述することができればこのタスクは遂行することができたことになる。

解答例： Italy is about the size of Arizona, a little smaller than Japan. The north part of the country is bordered by Austria and Switzerland. The peninsula is shaped very much like a

boot.

このように、タスクの記述だけでなく、can-say の内容を示すことで、具体性のある can-do を示すことができるということです。

タスクとタスク・ハンドリング力

タスクは無数に存在し、個々のタスクをリストしても英語を学ぶ際にはその場限り（アドホック）なものになってしまいます。そこで、タスクより少し抽象度を上げて、タスクを行うのに求められるスキル面に注目することが必要となります。スキルはある程度鍛えることができます。無数のタスクの背後にあるスキルにはどのようなものがあるのでしょうか。以下は、その口頭によるタスクを行う際に想定できるスキルの代表的なものです。

- 雑談力(発問、応答)
- 発表力 (speech、presentation など)
- 事物描写力 (show & tell など)
- 比較記述力 (優劣、長短)
- 物語展開力 (朝起きての出来事：記述と意見 (コメント))
- 対話力 (ディスカッション、ディベート、立場表明)
- 交渉力 (説得、妥協、提案)
- 議事進行力(会議、シンポジウム)
- 会話管理力 (応答、発問、割り込み、話題変更)
- 関係調整力(依頼、提案、約束、謝罪、念押しなど)

これらのスキルは個別具体的なタスクを行う際に使うことができるものであり、訓練をすることができます。タスク・ハンドリング力を育てるといふ際に、その対象となるのはこれらのスキルでなければなりません。例えば、雑談力をつけるにはいろいろな角度から自在に質問をし、応答する力が求められます。その際に、文を単位として話をするのではなく、断片（チャンク）を単位にするということも考慮すべき点となります。というのは、雑談での英語では完全な文を連鎖させるというより、断片を連鎖させて表現が行われるからです。雑談力においては、文を完結させようとするのではなく、思いついたコトバをまず口にし、意味を完結するために表現を追加することが必要です。頭の中で文を作るのではなく、浮かんできた表現をどんどん口にすることが雑談の自然な姿であり、その分、言いよどみやためらい（「うーん」「っていうか」など）を表す表現もたくさん使われます。事情は英語でも同じです。雑談の英語では、完結しない文が多くみられ断片性がその特徴となります。そして、断片性故に、日常会話に自然さが生まれるのです。

事物描写力とは、何か事物について説明する際のスキルで、「タイプ（種類）で語る」「直

訳する、由来を説明する」「比較する」「用途や使い方を説明する」「素材や形状を説明する」などといった表現方法を用います。例えば「ラムネ」について説明を求められたとします。目の前にラムネの実物はありません。ここで示した表現方法を使って、例えば以下のように説明することができるでしょう。

Ramune is a type of soft drink in a bottle. (タイプ)

Ramune comes from “lemonade.” (由来) Some Japanese took the two words as sounding similar.

In the bottle, a small glass ball is placed at the top of the bottle. (形状)

It's a lid. To drink, push the ball down hard with your thumb into the bottle. (用途・働き)

一方、発表力などでは多くの定型表現が使われ、それによって発表という流れが作られていきます。「問題を討議する」際には、議事進行力とか対話力が求められますが、大きな流れとして「討議の開始（目的の提示）」「問題の分析（原因の究明）」「解決策を提案」「解決策の評価（長短の議論、実効性の議論、異議など）」「解決策についての同意」「議事の終了」があり、言語リソースとしても We are here today to talk about …, The problem is …., Let me propose …, I support / I'm against the proposal., Does anyone have any other suggestions? などの定型表現が多く使われます。したがって、議事進行力や対話力は、手続きの流れを理解し、そこでよく使われる表現が使えるかどうかの鍵となります。

いずれにせよ、個別のタスクの背後には共通のスキルがあり、それぞれのスキルの特性を分析し、それを身に付けるということが英語力を高める上では大切です。

おわりに

英語の言語リソースがなければ英語でタスクを行うことはできません。世界共通語としての英語という状況を鑑みても、語彙、文法、慣用表現はコモン・コア（共通の核）として必要です。語彙の中でもとりわけ、基本語は、文化背景などに関わらず共通して使われるでしょうし、文法も英語固有の仕組みであって、文化差が表れる表現を除けば、同様の文法を共有していることが世界共通語として英語が機能するかどうかの鍵となります。また、慣用表現は、英語文化圏で発達したものですが、もっとも効率よく話し手の意図を表すという意味において、文化色の強い慣用表現を除けば、世界共通語としての英語のコモン・コアだといえるでしょう。例えば「何かを依頼する」際に Could you please …? (会話) や I'd appreciate it if you could… (文章) が慣用表現として使われますが、こういった表現は、世界中で英語を学ぶ際に学習の対象に含まれるでしょう。正確を期していえば、本稿では、語彙力、文法力、慣用表現力の習得に力点を置いており、それらを含む言語リソースを使ってどういう英語を実際に話すかは、まさに my English の個性の表れだと考えています。

*本稿は『英語を使いこなすための実践的学習法：my English のすすめ』（大修館, 2016）の第二章に含まれています。